

第三共和制の世俗学校計画とデュルケーム —デュルケームのユダヤ系出自に着目して—

Third Republic Secular School Plan and Durkheim —Focusing on Durkheim's Jewish Origins—

平田 文子*
Fumiko HIRATA

1. はじめに

フランスでは19世紀末に第三共和制の文部大臣ジュール・フェリー (Jules Ferry, 1832-1893) によって、義務・無償・ライシテ (世俗性) の三原則による近代的な教育システムが創設された。このことは、国民教育の主導権をカトリック教会から政府の手に移行させたという意味においてフランスの教育史上画期的な出来事であった。そのため、カトリックの教義に依らない世俗道徳論を教える大学教員が求められ、その役を担ったのがエミール・デュルケーム (Émile Durkheim, 1858-1917) である。実は、彼の研究手法としての実証主義と、思想としての宗教性は絶妙なバランスをもって彼の著作の中に表現されている。筆者は彼の宗教性に焦点を当ててユダヤ教思想との関係から幾つかの論文を発表してきた¹。デュルケームは、世俗道徳といえども宗教的要素を失ったら道徳としての性質を一举に失う²と主張しているからである。デュルケームの父親がユダヤ教のラビであったことはよく知られている。つまり、カトリック教会と、それに対抗する勢力という構図を考えたとき、ユダヤ教ラビの息子のデュルケームが対カトリック教会の施策のキーパーソンとして抜擢されたと考えても不思議なことではない。しかし、デュルケームのユダヤ系出自に焦点をあててこの問題を論じた先行研究は管見の限り見出すことはできなかった。本稿では、まず、デュルケームの出自に関する資料を提示し、彼のユダヤ教徒としての足跡を示す。次に、脱教会権力の施策にデュルケームが登用された経緯についてユダヤ教との関係から述べる。デュルケームは棄教したことが前提として語られてきたため、彼の出自やユダヤ教思想について取り上げられることは少なく、彼の道徳論は専ら実証主義的経験科学としての側面が強調されてきた³。本稿は、デュルケームの出自の問題を積極的に取り上げることで、当時の公教育制度樹立の立役者たちの意図をラビの息子のデュルケームの登用という視点から述べる。

2. デュルケームのユダヤ教徒としての痕跡

(1) デュルケームの割礼の記録

デュルケームは、進学のために故郷のユダヤ教徒共同体を離れパリに移住した時からユダヤ教を棄教したとされてきた⁴。彼が故郷を離れてからはユダヤ教の儀式への参加を拒み、自分の葬儀も世俗的に

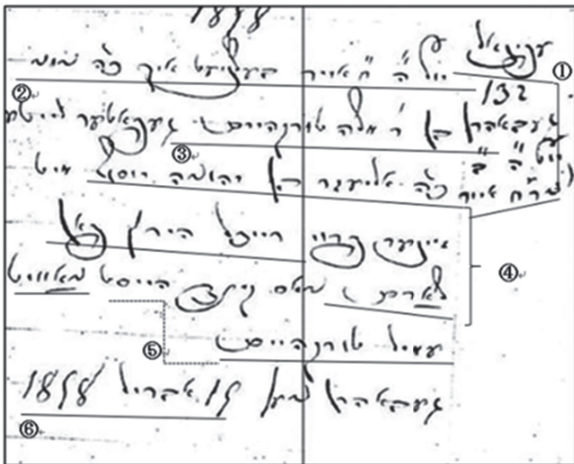
* 埼玉工業大学人間社会学部情報社会学科

行ったのも事実である⁵。しかし、本節で提示する資料の数々は、公にはいかなる宗教にも属さない共和制市民でありながら、プライベートにおいては「モーセの信仰」すなわちユダヤ教徒としての信仰生活があったことを彷彿とさせるものである。

ユダヤ教徒の生後間もない男児に行われる割礼の儀式に従ってダヴィド＝エミール・デュルケームが生後8日目に割礼を受けた記録が発見された（資料1.）。この資料は、イディッシュ語⁶というアシュケナジ系ユダヤ教徒特有の言語のメモ書き（写真複写）である。話し言葉としてのイディッシュ語を書くときには、彼らはヘブライ語アルファベットの筆記体（草書体）を使用していた。つまり、このメモ書きはイディッシュ語のヘブライ語筆記体表記である。このメモは、ストラスブール及び、バ・ラン県の大ラビ・歴史家のマックス・ワルシャウスキー（Max Warschawski, 1925-2006）のプライベートな資料の中から発見された。ミシェル・ロテ（Michel Rothé）が、パリの「世界イスラエリート連盟図書館」（Bibliothèque de l'Alliance israélite universelle）のアブラハム・マルテート（Avraham Malthête）に識別を依頼した。アルザス・ロレーヌ地方で、多くの赤ん坊に割礼を施していたアロン・レヴィ（Aron Lévy, 1806-1864）の割礼の記録を写真複写したものであるとマルテートは判定した⁷。資料1.の活字体と邦訳は次のようになる⁸。

資料中の「132」は、レヴィが割礼を行った132人目の赤ん坊ということである。下線①に、デュルケームの生まれ故郷の地名「エピナル（Épinal）」と子どもの誕生日が記されている。下線②には、「ダビデ」の名前が見られる。エミールは、祖父の「ダヴィド」の名を受け継いだ。聖書の「ダビデ」と同様の表記、活字体（דָּוִד）が筆記体で記されている⁹。エミールの父親のモイーズ・デュルケーム（Moïse Durkheim, 1805-1896）は、ヴォージュ県とオート＝マルヌ県のラビとなり、1863年にエピナルにシナゴークが創設され、そのシナゴークを任された¹⁰。下線②に、1858年のユダヤ歴イヤル月（4月～5月のこと）の木曜日にダビデ君に私は割礼を行ったと記されている。それは、モシェ・トゥルクハイム（モイーズ・デュルケームのこと）の息子である（下線③）。

続けて立会人の夫婦の名前、ヘラ・エリエゼル・ベン・イエフダ・ヨセフ君と、レイヒェル・ヘレツ・フォン・シャルムさん（下線④）がある。そして、ダヴィット・エミール・トゥルクハイム（ダヴィド＝エミール・デュルケーム）の名前（下線⑤）と誕生日が記されている（下線⑥）。この記録からイディッシュ語とヘブライ語アルファベット筆記体を共通の言語としていたユダヤ教徒の生活をうかがい知ることができる。アルザス・ロレーヌ地方の独特な文化ともフランス特有の文化とも異なるユダヤ文化の中にデュルケームの生活があった。



資料1. Avraham Malthête, 《Le Mohelbuch d' Aron Lévy :Un registre de circoncisions :le Mohelbuch d' Aron Lévy, chantre à Épinal (1844-1863)》.

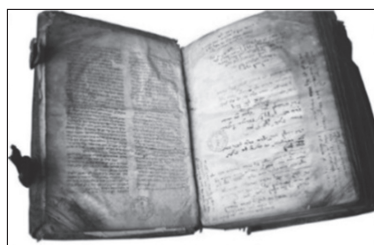
(2) 中世から受け継がれてきたタルムード解釈本を受け継ぐ者として

ユダヤ教徒の歴史研究家のパスカル・フォステイニ（Pascal Faustini）は、世界イスラエル連盟図書館に貯蔵されていたマニスクリの集成を発見した（資料2.参照）。その表紙には、ラビ・デュルケーム（モイーズ・デュルケーム）の所蔵であったこの集成は、コレージュ・ド・フランスの教授、マルセル・モース（Marcel Mauss, 1872-1950）の弟のアンリ・モース（Henri Mauss）によって1956年12月19日に世界イスラエリート連盟図書館に寄贈されたと記されていた¹¹。モースはエミール・デュルケームの甥にあたる。書体は活字体のヘブライ語である。フォステイニは次のように述べる。

16世紀にロスハイムに居住していたユダヤ教徒の家族がごくわずかであったことに照らしてみても[8人の家長からなる家族しかいなかった]、ヨーゼルマン・ロスハイム（Joselmann de Rosheim, 1478-1554）との血のつながりは確実である。ヨーゼルマン・ロスハイムとは、ラビで、アルザスおよびドイツのユダヤ教徒の中でも代表的な人物であり、神聖ローマ皇帝カール5世以前の時代に、同信者たちを何度も保護したことで知られた人物である。（中略）別の言葉でいうと、エミール・デュルケームは、間違いなく16世紀のこの偉大なラビの血統であることが示された¹²（[]は原文）。

15、16世紀を通じて、追放令と帰還許可が交互に出され、その時々でアルザスの田園部の諸侯領を渡り歩きながら細々と存続を図っていく以外にユダヤ教徒の生きる道はなかった¹³。ヨーゼルマン・ロスハイムはそのような状況下にあって多くのアルザス及び現在のドイツ方面の同信者たちを保護した人物であった。20世紀初頭にデュルケームがユダヤ教徒孤児の保護活動に尽力したことが祖先のエピソードと重なる。更に、エミールには兄がいたにもかかわらず集成を受け継ぐ者として祖父の「ダヴィド」の名を継いでいたことが、父親からラビを受け継ぐための教育を受けていたことを裏付けているかのようである。この集成はダヴィドからその息子のモシェへ、モシェからその息子のダヴィドへと受け継がれている。ヘブライ語のモシェとは、つまりフランス語のモイーズ（Moïse）のことである。

エミール・デュルケームの父親はモイーズ、そして祖父はダヴィド、曾祖父はシモン＝モイーズ・フォルヒハイム（Simon Moïse Horschheim）である¹⁴。つまり、曾祖父（モイーズ）→祖父（ダヴィド）→父（モイーズ）→子（ダヴィド＝エミール・デュルケーム）という慣例に従って集成が受け継がれてきていた。デュルケームの死をもって約500年受け継がれてきたタルムード研究がここで途絶えたことは残念である。しかし、デュルケームの甥のモースの弟がこの集成を図書館に寄贈したことでヨーゼルマン・ロスハイムの子孫としてのデュルケームが明らかになった。



資料2. デュルケームの家に受け継がれてきたタルムード解釈の手書きの本

所蔵場所：Bibliothécaire de l'Alliance Israélite Universelle à Paris.

出典：<http://judaisme.sdv.fr/genealog/jos-durkh/jos-durkh.htm>.

(3) デュルケームの墓石上のヘブライ語と埋葬記録

デュルケームの墓石にヘブライ語が彫られていたことはよく知られていた¹⁵。しかし、現在では判読が不可能なほど風化が進んでいる¹⁶ことからあまり取り上げられることはなかった。また、モンパルナスの共同墓地のユダヤ教徒区画（あるいはユダヤ系出自者を含む区画）に位置するデュルケームの墓は、元々は妻の一族の墓であったこともあり、この碑銘はデュルケームに捧げられたものとは断定できない¹⁷と言われてきた。現在では判読が困難なヘブライ語ではあるものの、判別された文字をラテンアルファベットに置き換えてマルセル・フルニエ（Marcel Fournier）が残してくれている¹⁸。それを筆者がヘブライ語アルファベットに再び変換したものが以下である。

“TEHI NAFSHO SERURAH BISROR HAHAYYM”

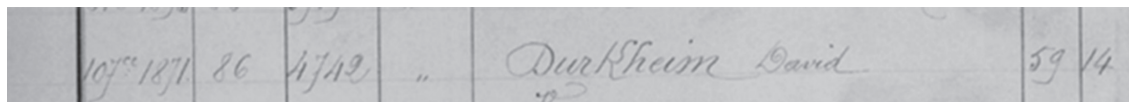
תהיה נפשו צרורה בצרור החיים ←

フルニエのフランス語訳は、『Que son/leur âme soit versée dans l' escarcelle des âmes des vivants』となっている。“dans l' escarcelle”「袋の中に」の仏訳について、当初、筆者はこの部分をフルニエの誤訳と捉えていた。Sをツと変換し、「イスラエルに」(בישראל バイスラエル)と筆者は邦訳した。しかし、次に示す墓石に掘られたヘブライ語聖書の一文を踏まえるとSはT S=ツと置き換えたほうが正しいとの指摘を受けた¹⁹。邦訳は、「彼の魂は命の袋にしまわれて在るでしょう。その生涯」である。この碑銘は、ダビデ王に長寿を予言したアビゲイル（アビゲイル、Abigail）の誓いについての旧約聖書の一文である²⁰。省略されたヘブライ語を聖書の全文で以下に示す。

主は生きておられ、あなたご自身も生きておられます。（中略）あなたは主の戦いをたたかわれる方で、生涯、悪いことがあなたを襲うことはございませんから。人が逆らって立ち、お命をねらって追い迫ってきても、お命はあなたの神、主によって命の袋に納められ、敵の命こそ主によって石投げ紐にしかけられ、投げ飛ばされることでございましょう（傍点引用者）²¹。

傍点部分「命の袋」と聖書に書かれている。この「命の袋」が上記の墓碑銘に使われていると考えられる。碑銘がデュルケームの名前の前に彫られている²²ことと、聖書で後にダビデの妻になるアビゲイルから贈られた言葉であることを考えると、この碑銘はダヴィド・デュルケームに捧げられた言葉と捉える方が自然であろう。

1916年3月23日、軍人で元下院議員のアドリアン・ゴードン・ド・ヴィレンヌ（Adrien Gaudin de Villaine, 1852-1930）は、「フランス、特にパリには、ドイツのスパイがいる」としてデュルケームのことを非難した。デュルケームは「外国人の滞在許可更新委員会」の委員となり、ドイツやロシアで迫害を受けていたユダヤ教徒をフランスに移住できるように尽力した。そのことから、ヴィレンヌは「委員会」を非難し「ソルボンヌのデュルケームはドイツのスパイである」と発言した²³。人命を救うために尽力していたデュルケームへの容赦ない攻撃と墓石の碑銘が重なる。



資料3. 埋葬記録。埋葬された日には「18日」、死亡した者の年齢は「59歳」、行政区分「14」。詳細な埋葬記録の番号が「4742」。パリ古文書館アーカイブス：<http://archives.paris.fr/r/123/archives-numerisees/>。

資料3.は、パリ市古文書館に保管されているモンパルナス墓地の『埋葬記録』からのものである。保管庫のなかの、1917年の“D”のページにダヴィド・デュルケーム（Durkheim David）と記録されている。デュルケームの埋葬記録を取り上げて彼のユダヤ性を論じたのは筆者が初めてである。役所への埋葬記録が、Émile ではなくユダヤ名の David で届けられている。「レジオン・ド・ヌール・シュヴァリエ賞」を受賞した有名なエミール・デュルケームは、一生を終えたときに「エミール」ではなく、ユダヤ教に由来する「ダヴィド」の名を残した。ここに、人知れず静かな信仰生活があったように思われる。逆説的に言うと、ユダヤ教を棄てた者の埋葬の記録をユダヤ名で記すであろうか。

（4）「私はラビの息子である」

アメリカの社会学者のハリー・アルパート（Harry Alpert, 1912-1977）は、デュルケーム社会学に関心を持ち、1932年から一年間、フランスのパリ大学とボルドー大学でデュルケミアンたちと共に研究を行った人物である²⁴。彼は1939年の著作で次のように述べている。

未来の模範となる宗教に関する巧妙な社会学理論は、長い血統を持つユダヤ教学者の直接の伝承物であった。そして、家族の伝統を引き継ぎながら、彼自身ラビの地位に就くための準備をしていた。（中略）注意が必要なのは、『社会分業論』における数多くの聖書からの引用である。

『宗教生活の原初形態』の著者は、決してラビというバックグラウンドを忘れてはいなかった。彼は、完全に、彼自身の多くを占めていた倫理的で宗教的な優先事の意識下にあったし、頻繁に、「私は結局ラビの息子である」と言って『社会学年報』の仲間たちに思い出を語る場面があった²⁵。

アルパートのフランス留学は1933年までである。ドイツでナチスが政権を握ったのは1933年、フランスでも反ユダヤ主義の勢力は高まった。この著作が発行されたのは1939年、ヴィシー政権の成立が1940年である。デュルケーム学派のモーリス・アルヴァックス（Maurice Halbwachs, 1877-1945）のユダヤ系の義父が親独義勇軍によって処刑されたのが1944年、アルヴァックスはユダヤ系出自ではなかったものの、義父への不当な処刑に抗議したために、同年7月26日に捕らえられてブーヘンヴァルト（Buchenwald）の強制収容所に送られ赤痢にかかり死亡した（1945年）²⁶。このことから「ユダヤ」との関わりがデュルケームの親族に与える影響を考えると、この著作が1939年にアメリカの研究者によってアメリカで出版されたことに注意を払う必要がある。つまり、上記引用文は、当国フランスではデュルケーム学派の誰も残せなかった貴重な証言である。

3. 政教分離の教育体制の確立とデュルケーム

(1) デュルケームと第三共和制の教育改革

冒頭で述べたように、19世紀末に教会権力から教育を自立させ政府主導の教育制度を確立させようとする動きの中で1882年、ジュール・フェリーによる無償・義務・ライシテの公教育制度が成立した。伊達聖伸は当時の脱宗教化の状況について、「宗教は脱政治化され、いっそう内面化の傾向が進む。代わりに新たな道德概念が彫琢され、宗教的なレトリックに訴えることなく市民を結びつける原理が探求されていく。それと同時平行で、科学と政治の分化が進む」と述べる²⁷。教会と国家の分離とともに、科学と政治の分化も進んだという伊達は、19世紀半ばに、道德、宗教、科学、政治といった重要な諸概念の布置が変わったとする²⁸。それまで漠然と一塊にされていたこの4つの概念が、独立して論じられるようになったということである。このことが学問としての社会科学の発展を急激に促すこととなった。政治が宗教と分離するのと同進行で哲学からの社会科学の分離が始まっていた。このような時代の変革期に、道德と宗教の分離及び、社会科学の哲学からの分離という難解な課題を任されたのがデュルケームであった。デュルケームはボルドー大学(1886年から1902年)で、のちにソルボンヌ大学で「教育の科学」の講義を行った。デュルケームがボルドー大学に就任するようになった経緯については、時の文部省高等教育局長ルイ・リアール(Louis Liard, 1846-1917)のデュルケーム登用への積極的な働きかけがあったことをジャン・クロード・フィユー(Jean-Claude Filloux)が明らかにしている²⁹。

リアールは、社会科学の発展と教会権力から公教育を分離させることの両方に関心を寄せていた。その頃デュルケームは社会学関連の論文を次々と執筆しその存在が知られるようになっていた。リアールは1885年のデュルケームの諸論文³⁰に注目し、大学改革に彼を役立てようと考えた。この1885年の諸論文とは、当時のドイツの社会思想家、シュフレとグンプロヴィチの著作に対する書評であった。グンプロヴィチの著作の書評でデュルケームは冒頭から「我々は、彼の規定する原理、方法、そしてその結論の大部分を認めることはない」³¹と手厳しい批判をしている。グンプロヴィチの考察が個人的な主観によるものであるとし、本場フランスの社会学がこれ以上ドイツ社会学に取って代わられることがあってはならないと述べている³²。このようなデュルケームの徹底したドイツ社会学への否定的な主張がリアールの目に留まり、ドイツとは異なるフランス独自の社会学を確立する人物としてデュルケームが適任であると判断された。リアールはデュルケームと会談を行い、デュルケームに共和制への共感と科学に基づく世俗道德論を樹立する意志について確認した³³。

(2) サン＝シモン主義とルイ・リアール

デュルケームの登用が決定された背景には、リアールとサン＝シモン主義者たちとの繋がりもあった。当時サン＝シモン(Claude Henri de Rouvroy Comte de Saint-Simon, 1760-1825)の社会思想を熱狂的に信奉する者たちが集まり、「無制限の競争原理を実践」する資本主義体制とは異なる国家体制の在り方を展望していた³⁴。サン＝シモン・サークル(Cercle Saint-Simon, 1883-)を創設したメンバーの一人がリアールである。1879年に初等教育局長に就任したフェルディナン・ビュイッソン(Ferdinand Édouard Buisson, 1841-1932)も、1884年にはこのサークルに参加していた³⁵。このサークルの1886年

の年報のリストにはデュルケームの名前の記載がある³⁶。

デュルケームは、ボルドー大学でサン＝シモンと社会主義の思想の公開講義を行っている (*Le socialism*, 1928)³⁷。この講義でデュルケームは社会主義の定義を提唱しているものの、その内容は、マルクスやエンゲルスの思想を否定的にとらえた新しい社会思想であった³⁸。彼は、社会学の萌芽はサン＝シモンの著作にこそ見いだせるとしてその功績を讃えている。

また、サン＝シモン・サークルには、ユダヤ系の富裕層の名前が多くみられる。ユダヤ系の知識人であり銀行家のオランド・ロドリゲス (Benjamin Olinde Rodrigues, 1795-1851) は、サン＝シモンの思想に惹かれて彼を経済的に支えていた。ロドリゲスを通して多くのユダヤ系出自者がサン＝シモン主義者となっていった³⁹。リアールはサン＝シモン主義を介してユダヤ系資産家・知識人とも繋がっていた。「金の亡者」、「詐欺まがいの金貸し」と中傷されてきたユダヤ系富裕層は、「サン＝シモン主義」というイデオロギーを隠れ蓑に、豊かな財力を使って国の開発事業や慈善事業を展開していた⁴⁰。フランスにおける開発事業とユダヤ資本とは切り離して考えることはできない。クレディ・モビリエ銀行を創設し鉄道事業でも知られるユダヤ系のペレール兄弟 (Jacob-Émile Péreire, 1800-1875, Isaac Péreire, 1806-1880) はロドリゲスのいとこで熱心なサン＝シモン主義者だった⁴¹。

(3) ビュイッソンとデュルケーム

ライシテの原理に則った学校教育の成立に大きく貢献したビュイッソンの後任としてデュルケームは1902年にソルボンヌ大学に赴任することとなる。ビュイッソンは、敬虔なプロテスタントの家庭に育った。彼は、哲学のアグレガシオンを取得したものの、その当時の第二帝政下では教職に従事するにあたっては皇帝 (帝政) への忠誠の宣言が必要とされていたために、共和制への強い信念を宣言していた彼はこれを拒んだ。そのために教職への道は閉ざされ、また、彼独特の斬新な宗教観はプロテスタント教会からの批判を受けスイスに亡命した⁴²。その後、1870年に第三共和制が成立するとビュイッソンは直ちに帰国し、1879年に初等教育局長に任命された。ジュール・フェリーの下で学校教育をカトリック教会から分離させる施策に力を注いだ。

ビュイッソンは『教育学・初等教育辞典』 (*Dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire*, 1878-1887)⁴³を編纂したことでよく知られている。1911年に刊行された改訂版の『新 教育学・初等教育辞典』⁴⁴では、デュルケームは、「児童」《Enfance》の部分をビュイッソンとの共著で担当し「教育」「教育学」の部分を単独で執筆した。実は辞典の中でビュイッソンは、「ユダヤ教徒」 (Juifs) の項目を設けている。この項目を執筆したのはヨセフ・シモン (Joseph Simon, 1836-1906) である。シモンはフランスの共和制の熱心な擁護者で、敬虔なユダヤ教徒で、ユダヤ史の専門家であった。更にユダヤ教徒の公教育の実施に尽力した人物である。パ＝ラン県 (Bas-Rhin) のムッターズホルツ (Muttersholtz) 出身の彼は、メス (Metz) のラビ学校でラビになるための訓練を受けた。ニーム (Nîmes) のユダヤ教徒共同体は、1858年から彼に学校の統治を要請し、この学校は「イスラエルの子供たちのための公立学校」となり、その後、一般の「公立学校」となった。シモンの評判は、共同体の枠を越えて、カトリックとプロテスタントの生徒たちの心も引き付けた⁴⁵。彼は、共和国・正義・社会的非差別を積極的に擁護する立場を生涯貫いた人物である。ビュイッソンは、このような人物を彼の辞典の「ユダヤ教徒」の執筆者として採用し、シモンは、この項目でユダヤ教徒の初等教育の歴史について7ページに渡って紹介している⁴⁶。また、ビュ

イッソンは、この辞典の「聖なる歴史」の項目で「ユダヤ教徒の歴史は人類の歴史の重要な部分であり、ローマやギリシアの歴史と同じくらいキリスト教徒の人々にとっても重要であり、私たちの授業計画から無くすことはできない」⁴⁷と述べている。アンヌ＝クレール・ユセル（Anne-Claire Husser）は、ビューイッソンがヘブライ語聖書のユダヤ教徒に伝承されてきた解釈の正当性を認めていたと述べている⁴⁸。また、ビューイッソンは、ドレフュス事件⁴⁹のドレフュス擁護派の中心的人物でもあった。彼は1898年に人権同盟を結成し1913年から1926年まで人権同盟の会長を務めた。周知の通り、デュルケームも人権同盟に参加し積極的にドレフュス擁護の活動を行った。人権尊重の精神においても二人は共鳴していた。

4. おわりに

ライシテの原理に則った宗教に依らない世俗道徳理論を確立したデュルケームがユダヤ系の出自であったことについては、今まで積極的に論じられては来なかった。しかし、ユダヤ教徒でありながら伝統主義的なユダヤ教徒とは異なり服装や文化においてはほぼ完全にフランスに同化していたデュルケームは、この施策に格好の人物であった。

本稿においては、教会権力への対抗策としてのユダヤ系のデュルケームの登用という視点を述べてきた。ジュール・フェリーはフリーメーソン、リアールはサン＝シモン主義、ビューイッソンがプロテスタント、デュルケームがユダヤ教であった。ライシテの施策にはマイノリティー側からの「中立性」の提案という意図があったと筆者は考えている。ユセルは、「ビューイッソンが推進しようとしたあらゆる信仰の中にある道徳のイメージは、非常に民族的な宗教の（フランス文化への）接近と参加であることに自然と気づかされる」⁵⁰（（ ）内引用者加筆）と述べている。つまり、ビューイッソンは非常に民族的な宗教、すなわちイスラエルの民の歴史に起源をもつユダヤ教に接近し「宗派を超えた聖性」の中に道徳性を見いだそうとした。そのビューイッソンが、ユダヤ系のデュルケームに学校計画における道徳教育論の立案を託したことは自然な選択であったように思われる。なぜなら、ユダヤ教は世俗主義的・現実主義的な思想を特徴とするからである。ユダヤ教における「聖性」とは、現実場面における他者との関係に見出される「人格の相互承認」のことを指す⁵¹。ユダヤ教の神は「人格の相互承認」という他者との交流の中に存在する。このような「他者との関係」という至って現実的なテーマを信仰の根幹に置いている。そしてこのテーマは人類にとっての普遍的テーマであることに気づかされる。法の起源に関するデュルケームの主張と重なる⁵²。換言すると、至って現実主義・世俗主義的な特徴を持つユダヤ教の本質が、デュルケームに「世俗」における「聖性」を語らせていたのである。

残念なことに、デュルケームへのスパイ容疑といった誹謗中傷をみると、このようなビジョンは一部の人々には受け入れられず、かえってユダヤ系勢力の国政参加により、反ユダヤ勢力の反感をかっただという見方もできる。中立性・公平性の提案とともに重視された普遍道徳の立案は、デュルケームの道徳的規準がユダヤ教を基盤としていることに気づかせることなく（あるいは等閑視されることをねらいつつ）、彼らの計画のもとに世俗道徳論として披露され、広く世俗道徳論として受け入れられてきたのである。

【註】

¹ 平田文子「デュルケームの『集合意識』概念とユダヤの歴史解釈」：歴史批判の視点を手掛かりとして『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊26 (2)、2019年。平田文子「デュルケーム社会的連帯論における道徳的原理：『ユダヤの本質』に注目して」『教育哲学研究』117、62-79頁、2018年。平田文子「デュルケーム道徳理論の実践的性格：新正統派ユダヤ教との関係に着目して」『日仏教育学会年報』23、49-59頁、2017年など。

² Émile Durkheim, *L'éducation morale*, PUF, 1974 (1922, 1925), cf.pp.6-7. (= 麻生誠・山村健訳『道徳教育論』、講談社、2014年、53頁参照)。草案はボルドー大学勤務の時代に着手されていた。

³ 例えば、麻生誠・原田彰・宮島喬『デュルケーム道徳教育論入門』有斐閣新書、1978年。古川敦「デュルケーム教育思想における『秩序』と『変動』の問題：危機の時代の理論として」『教育社会学研究』37、1982年、118-128頁。など。本稿執筆中に左記の論文が発表された。「ユダヤの法に照らしてデュルケームを再読する」というテイラー・ペイジ・ウィンフィールドの論文である。この論文は筆者が今まで指摘してきたことに類似している内容もある。しかし、ウィンフィールドの「人間の神聖と不敬の区別」についてのデュルケームの解釈には異論がある（この件については改めて述べることにする）。筆者の場合は、デュルケームの「人格の相互承認」をユダヤ教思想と照らして、そこを中心に論じてきた。ウィンフィールドのようにデュルケームのすべての業績をユダヤ教で解釈することは危険であると考えている。アレクサンドル・デルザンスキーが「ユダヤ教思想を基盤としてその上にデュルケーム独自の実証主義的社会学理論が展開されている」とする意見に筆者も同意している。 Winfield, Taylor Paige, "Rereading Durkheim in light of Jewish :How a Traditional Rabbinic Thought-model Shapes his Scholarship," *Theory and Society* (2020) 49, pp.563-595, 2020. Derczansky, Alexandre, 1990, 《Note sur la judéité de Durkheim》, *Archives de sciences sociales des religions*, Vol.69, pp.157-160.

⁴ Filloux, Jean-Claude, *Durkheim et le socialisme*, Librairie Droz, 1977, cf.p.36. Fournier, Marcel, *Émile Durkheim (1858-1917)*, Fayard, 2007, cf.pp.34-35, 46. 作田啓一『デュルケーム』講談社〔人類の知的財産 57〕、1983年、5頁、77頁参照。麻生・原田・宮島前掲書、1978：5頁など。

⁵ Landau, Philippe, Émile Durkheim, un sociologue à la périphérie communautaire, *Information juive* n°281, pp.29-31, 2008.

⁶ ユダヤ語の意。ドイツ語方言とヘブライ語の混合言語。聖書ヘブライ語を基に日常会話用に変化させたもの。

⁷ Malthête, Avraham, 《Le Mohelbuch d' Aron Lévy :Un registre de circoncisions :le Mohelbuch d' Aron Lévy, chantre à Épinal (1844-1863)》, pp.1-5, 2012. https://www.academia.edu/32240487/Le_Mohelbuch_dAron_L%C3%A9vy_Un_registre_de_circoncisions_le_Mohelbuch_dAron_L%C3%A9vy_chantre_%C3%A0_%C3%89pinal_1844-1863 (2019年2/11最終確認)。

⁸ 邦訳は、マルテートのフランス語訳を参照し適宜改訳した。東京大学名誉教授の市川裕氏に助言をいただいた。イスラエル大使館勤務の筆者のヘブライ語の教師である根本豪（ユダヤ学者）氏にも略語についてご教示いただいた。判読不可能な文字は省略した。

⁹ ユダヤ教では、活字体ヘブライ語は神の言葉としての特別な意味を持つため、聖書に関すること以外

の日常の書き言葉としては筆記体を用いた。

¹⁰ Grasser, Jacques, 《Épinal à l' époque d' Émile Durkheim》, Fournier, Marcel, et Charles Kraemer eds., *Durkheim avant Durkheim : Une jeunesse vosgienne*, L' Harmattan, 2014. Fournier, *op.cit.*, 2007 : pp.23-24.

¹¹ Faustini, Pascal, Actes du 33^e Colloque de la SHIAL à Strasbourg le 13 février 2011.

¹² Faustini, Pascal, 《Les racines d' Émile Durkheim Migrations dans l' espace rhénan (1400-1800)》, Fournier et Kraemer eds., *op.cit.*, 2014, cf.p.14.

¹³ 菅野賢治、『フランスユダヤの歴史』上下巻、慶應義塾大学出版会、2016年、上164頁参照。

¹⁴ Faustini, *op.cit.*, 2014 : p.14-20. Faustini, Pascal, De Joselmann de Rosheim au sociologue Emile Durkheim : l'itinéraire d'un manuscrit du 16e au 20e siècle, <http://judaisme.sdv.fr/genealog/jos-durkh/jos-durkh.htm>. (2021年1月6日最終確認) .

¹⁵ Fournier, *op.cit.*, 2007 : p.910. Pickering, William Stuart Frederick, "The Enigma of Durkheim's Jewishness," Pickering, W.S.F. and Herminio Martins eds., *Debating Durkheim*, Routledge, 1994, cf.p.35.

¹⁶ *Ibid.*, p.35.

¹⁷ *Ibid.*, p.39, note16.

¹⁸ Fournier, *op.cit.*, 2007 : p.910.

¹⁹ 市川裕氏にご指摘をいただいた。

²⁰ Fournier, *op.cit.*, 2007 : p.910.

²¹ ミルトス・ヘブライ文化研究所編『ヘブライ語聖書対訳シリーズ14 サムエル記Ⅱ：上19章～下8章』1994年。

²² Pickering, *op.cit.*, 1994 : p.39, note16.

²³ Fournier, *op.cit.*, 2007 : p.888.

²⁴ Hill, Richard J., and Walter T. Martin, "In Memoriam, Harry Alpert" *Public Opinion Quarterly* 42, Oxford Academic, 1978, pp.141-142,

²⁵ Alpert, Harry, *Émile Durkheim and His Sociology*, Columbia University Press, 1939, cf.p.15.

²⁶ Novick, Peter, *The Holocaust in American Life*, Mariner Books, 1999, cf.p.246.

²⁷ 伊達聖伸『ライシテ、道徳、宗教学』勁草書房、2010年、1頁参照。

²⁸ 同書、116頁。

²⁹ Filloux, Jean-Claude, *Durkheim et l' éducation*, PUF, 1994, cf.p.7. (=J-Cフィュー、古川敦訳『デュルケムの教育論』行路社、2001年、12頁参照)。

³⁰ Durkheim, Émile, 《Revue de Schöffle, *Bau und Leben des Sozialen Körpers*》, *Revue philosophique* 19, pp.84-101, 1885-a. Durkheim, Émile, 《Revue de Gumplowicz, *Grundriss der Sociologie*》, *Revue philosophique* 20, pp.627-634, 1885-b.

³¹ *ibid.*, p.627.

³² *ibid.*, p.627.

³³ Lenoir, Raymond, 《L' œuvre sociologique d' Durkheim》, *Europe* 13, p.294, 1930. Alpert, *op.cit.*, 1939 : p.38.

- ³⁴ 中川洋一郎『暴力なき社会主義？：フランス第二帝政下のクレディ・モビリエ』学文社、2004年、56頁参照。
- ³⁵ Cercle Saint-Simon eds., *Société historique et cercle Saint-Simon : bulletin*, 1884 (A2) , cf.p.146.
- ³⁶ Cercle Saint-Simon eds., *Annuaire*, Paris, 1886, cf.p.56.
- ³⁷ Durkheim, Émile, *Le socialisme : sa définition, ses débuts, la doctrine saint-simonienne*, édité par M. Mauss, PUF, [1928] 1971. (= 森博訳『社会主義およびサン＝シモン』 恒星社厚生閣、1977年)。
- ³⁸ *ibid*, pp.118-124=113-121頁。デュルケーム特有の社会主義批判については宮島喬の次の著作を参照。宮島喬『デュルケーム社会理論の研究』東京大学出版会、1977年、89-105頁、137-142頁参照。
- ³⁹ 菅野前掲書、2016：上272-276頁。デュルケーム自身もサン＝シモンが影響を与えた人物としてロドリゲスの名前を挙げている (Durkheim, *op.cit.*, [1928] 1971：p.114=108頁)。
- ⁴⁰ 中川前掲書、2004：6-7頁。
- ⁴¹ Autin, Jean, *Les frères Pereire : le bonheur d'entreprendre*, Perrin, 1984, cf.pp.28-29,35,etc. 中川前掲書、2004：58-75頁。菅野前掲書、2016：上272-273頁。
- ⁴² 尾上雅信『ビュイッソンの教育：第三共和政初期教育改革史研究の一環として』東信堂、2007年、22-29頁。小川勉、「教育闘争と知のヘゲモニー：フランス第三共和政期を中心に」『法政研究』61、1995年、313-429頁を参照。
- ⁴³ Buisson, Ferdinand, ed., *Dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire*, Hachette, 1878-1887.
- ⁴⁴ Buisson, Ferdinand, ed., *Nouveau dictionnaire de pédagogie et d'éducation primaire*, Hachette, 1911.
- ⁴⁵ Bloch, Anny, 《Joseph Simon》, <http://judaisme.sdv.fr/histoire/document/ecoles/nimes/nimes.htm>. (2020年6月13日最終確認)。
- ⁴⁶ Simon, Joseph ,《JUIFS》, Buisson, ed., *op.cit.*, 1887：Tome II, pp.1434-1441.
- ⁴⁷ Buisson, 《Histoire sainte》, Buisson, ed., *op.cit.*, 1887：Tome I, pp.1280-1284, cf., p.1284.
- ⁴⁸ Husser, Anne-Claire, 《Ferdinand Buisson et l'enseignement de l'histoire sainte à l'école primaire》, *Histoire, monde et cultures religieuses*, n°32, pp.29-41, 2014, cf.40. 「宗教的な精神性は、世俗的な学校内でのヘブライ人の歴史の継続的な研究によって正当化される」というビュイッソンの思想について述べている。
- ⁴⁹ ユダヤ系出自のアドルフ・ドレフュス (Alfred Dreyfus, 1859-1935) 大尉がドイツのスパイだとして終身刑を言い渡された冤罪事件。1906年に無罪が確定。
- ⁵⁰ Husser, *op.cit.*, 2014：p.41.
- ⁵¹ 平田前掲論文、2018年参照。
- ⁵² 平田文子「デュルケームの『社会的連帯論』に隠されていたメッセージ：一アノミーからの離脱を求めて」『第18回埼玉工業大学若手研究フォーラム 2020 講演論文集』 pp.3-10、2020年。

